
近世ドイツにおける新聞とモード誌における構文

— 「語り」のテキストと「記述」のテキスト

芹澤 円

1. はじめに

印刷物の歴史を振り返るには、グーテンベルクによって活版印刷術が発明された15世紀中頃まで遡る必要がある。この発明によって、印刷物が流布し始め、16世紀に入ると、宗教改革者は自身の思想を広めるための手段として印刷物を使用する。彼らは、文字の読めない民衆に対して一枚刷りのビラ (Flugblatt) を利用して、民衆に対しカトリック教会の腐敗を訴えかけた。このメディアは、一枚刷りの印刷物であり、テキストと挿絵で構成されていた。付随された挿絵を見ることで、文字を読むことが出来ない民衆も、どのような事柄が伝えられているのかを把握することができた。これと同じ頃、同様に一枚刷りの形の「最新報告 (Neue Zeitung)」と呼ばれるメディアも登場している。「最新報告」は、例えば突如お腹が膨れ始めた女性について書かれた「エスリンゲンの乙女」(1549年) 等のように、奇妙な (merkwürdig) な出来事等を伝え始めた。16世紀に誕生した「最新報告」が先駆けとなり、17世紀初期には週刊新聞が登場した。週刊新聞が登場したのは、実はヨーロッパの中でこの17世紀初頭のドイツが最初である (鈴木 2000: 63 を参照)。この種の週刊新聞には、もはや挿絵は付随されず、テキストのみが書かれており、ケルンやパリなどさまざまな地域からの出来事に関しておよそ6から8つの記事が掲載されていた。

しかしながら18世紀になると、印刷物を取り巻く諸状況が変化し始める。その背景としては、18世紀のヨーロッパが、「宮廷のみならず、多くの都市において、人びとの能動的、受動的文化的消費行動が絶頂期を迎えた時代」(ノルト 2013: 3) であったことが大きく関係していると言えるだろう。ノルト (2013) は、18世紀に「文化的供給の広がり」と多様性 (ノルト 2013: 4) が存在し、「劇場やコンサート、展覧会などでの直接的な文化体験のほか、新聞、雑誌、書物、複製版画など、

いわば間接的に文化を知覚するための多様な手段が形成」されたことを指摘している（同上、同頁）。このような時代の中で、定期刊行雑誌として『豪奢とモードのジャーナル』（„Journal des Luxus und der Moden“）が1786年に登場する。現在のベストセラーに値すると言われている（Kuhles 2000: 489 及び、Kröll 1979: 162 を参照）このモード雑誌は、とりわけ贅沢や流行といった側面から人生をよりよく送るための情報を扱った、実用テキストの一つである。印刷物は、時代の流れの中で徐々に娯楽をも伝達する術としてその機能を拡大していったのである。

以上のようなドイツにおける印刷物の歴史を踏まえて、本論文では、次の2点について考察したい。

- 1) 17世紀初期の週刊新聞と18世紀末の新聞の構文を通時的に比較すると、どのような変化が見られるのか。
- 2) 18世紀末の新聞と18世紀末のモード雑誌の構文を共時的に比較すると、どのような違いがみられるのか。

本論文において具体的に分析対象とするのは、次のものである。17世紀初頭の週刊新聞としては、1609年の週刊新聞《Relation》を資料として、1月から12月までの記事をそれぞれ1つずつ扱う（合計12記事）。18世紀末の新聞としては、1786年の『バイロイト新聞』（Bayreuther Zeitungen）を使用する。この新聞においても1月から12月までの記事をそれぞれ1つずつ用いる（合計12記事）。モード雑誌としては、1786年に創刊された上述の『豪奢とモードのジャーナル』を使用する。この雑誌の中でもとりわけ女性の服装に関する記事のみを扱うこととする。本論文では1786年の4月号と1787年から1789年の3年間における5月号に掲載された女性の服装に関する章を扱う。¹⁾このモード雑誌では1つの章が約3つの記事で構成されているため、今回選出した記事では合計が13記事となって

1) 季節によって女性の服装に関するモードに大きな差異が生じないようにするために、4、5月号を扱うこととした。また、1787年からの記事では、一ヶ月前の事柄が掲載されるようになった。すなわち、本論文で分析対象としている1787年から1789年の5月号の記事は4月のモードを伝えている。そのため、分析対象の4年間はずべて4月のモードを扱っていることになる。

いる。

2. 17世紀初期と18世紀末の新聞における構文比較

2.1. 副文の使用

まず、副文に着目して分析を行ってみよう。17世紀初頭の週刊新聞《Relation》では、どの程度の副文が使用されていたのであろうか。以下の表1では、1609年の1月8日、Cölnからの記事（全343語）を例に、観察された副文を示す。

表1：17世紀初頭の週刊新聞における副文の例²⁾

場所と日付	語数	副文
1609年 1月8日 Cöln	343	-weil... -HS-weil..., weil... -HS-darbey ³⁾ ... -das (= dass)... -daß... -wo ... -welcher... -HS-welche... -vnd gleichwohl ⁴⁾ ...

上記に示した1609年1月8日付けの週刊新聞の記事においては、合計で10の副文が観察された。これは計算すると、343語からなる記事なので、100語あたり副文が2.9文あったことになる。⁵⁾同様にして17世紀初頭の週刊新聞における12記事の副文の出現個数示すと、次の表2のようになる。

- 2) HSとはHauptsatz（主文）のこと。なお、以下副文は、主文と視覚的に区別しやすいように囲みしておく。
- 3) Ebert et al. (1993)によれば、関係文において「先行詞が人の場合には前置詞+ derが使用され、無生物の場合にはda (r) - +前置詞が現れる」(Ebert/Reichmann/Solms/Wegera/1993, 446)。また、シュトラスナー (2002) は当時の新聞の特徴として「文を連結し複合化する手段として、特に代名詞的副詞を伴った継続的關係文 (weiterführender Nebensatz mit Pronominaladverbien) が重要な役割を果たす」(シュトラスナー 2002, 100) と述べている。このように、darbeyは初期新高ドイツ語期において、今日のwobeiと同様の關係文を導く關係詞として機能した。
- 4) このgleichwohlは、現代ドイツ語のobwohlと同様の認容を表す従属接続詞である。
- 5) ここで算出した値は、後述する対数尤度比の計算において副文使用頻度を比較するために使用する。

表 2 : 17 世紀初頭の週刊新聞における 12 記事の副文の出現割合 (100 語あたり)

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10	11	12	平均
2.9	2.1	2.9	3.4	4.6	3.9	3.7	2.3	6.4	4.0	4.0	3.7	3.6

この結果から、17 世紀初頭の週刊新聞では平均して 100 語あたり 3.6 文の副文が観察されるという結果がえられた。

次に、1786 年 1 月 2 日に刊行された『パイロイト新聞』の中から 1785 年 11 月 24 日、Petersburg からの記事 (全 233 語) を例にして副文の使用を示すと、以下の表 3 のようになる。

表 3 : 18 世紀末の『パイロイト新聞』における副文の例

場所と日付	語数	副文
1785 年 11 月 24 日 Petersburg (1786 年 1 月 2 日)	233	-so ... -daher ⁶⁾ ... -wenn ... -HS-da ...-daß ... -daß... -daß...

1786 年 1 月 2 日に掲載されていた記事では副文が 7 観察された。233 語からなる記事なので、100 語中、副文が 3 文使用されていたことになる。18 世紀末の『パイロイト新聞』について 12 の記事の副文の割合をそれぞれ示すと、以下の表 4 のとおりである。

表 4 : 18 世紀末『パイロイト新聞』における 12 記事の副文の出現割合

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10	11	12	平均
3.0	3.2	2.8	4.5	4.7	3.7	3.4	2.8	3.5	1.2	3.1	4.4	3.3

6) ここでの daher は、関係詞として副文 (関係文) を導いている。当該のテキストは *Die Antwort, so der König von Preussen auf dieses Memoire ertheilte, war nicht befriedigend; daher der Russische Vicekanzler ein zweytes an den Botschafter der Kayserin bey dem König von Preussen gelangen ließ.* となっている。

この結果から、1788年の『パイロイト新聞』では平均して100語中、3.3文の副文があったことになる。

17世紀初期の週刊新聞では100語中3.6文の副文があり、18世紀末の『パイロイト新聞』では3.3文の副文が観察された。ここで、対数尤度比 (Log-likelihood) によって、17世紀と18世紀の分析結果として得られた3.6と3.3という2つの副文使用の平均値に有意差があるのかどうかを見てみよう。そこで得られた対数尤度比は0.08という値である。この0.08という値は、0.5%基準(100回に5回錯誤することのある可能性)で2つの値に有意差があることを示す値である3.84よりも遥かに低い数値であるので、17世紀初期と18世紀末の新聞テキストにおける副文使用の割合には有意差がないと言うことができる。

2.2. 数珠つなぎ複合文

Demske-Neumann (1996) は、17世紀の週刊新聞における統語的な構造の分析を行っている。彼女は Admoni (1980) の分類に従い、4つの複合文のタイプを示した。一つ目は「数珠つなぎ複合文」(abperlendes Satzgefüge) であり、「主文の後に副文の複合体がつながっていく」(Demske-Neumann, 1996: 78) 構文のことである。彼女は、この数珠つなぎ複合文の例として以下のテキストを示している(以下に示すテキストA～Dは、Demske-Neumann 1996: 79を引用したものであり、括弧内のテキスト情報は Demsken-Neumann による。また太字は、主文であることを示している。)

A) **Sonsten verlautet aus Polen/** daß der Schwedische Ambassadeur etlich und 40. puncten am Polnischen Hoff eingegeben hätte/ warvon die gewißheit mit nechstem erfolgen wird. (Relation 1667 26,3)

二つ目は、「副文が先行した複合文」(geschlossenes Satzgefüge) と呼ばれる構文である。この構文では、「主文の前に(前域)に副文の複合文がある」(Demske-Neumann, 1996: 78)。Demske-Neumann は、以下のようなテキストを geschlossenes Satzgefüge として示している。

B) weilen die Ungarn einige Regimente zu Ihrer Kays. Maj. Beschützung underhalten wollen/ **als⁷⁾ solle der Landtag zu Odenburg vorgehen und die Residentz in der Neustatt verbleiben.** (Postzeitung 1667 110,21)

さらに三つ目は、「主文が中央に配置された複合文」(zentriertes Satzgefüge)である。この複合文では、「副文の複合文が主文の前域と後域に分かれている」(Demske-Neumann, 1996: 78) 構文のことである。Demske-Neumannによれば、以下のようなテキストがこの構文に該当する。

C) Weilen der Bischoff zu Tournay in wärender belägerung gestorben/ **als ist von Ihrer Majestät dessen Vetter darzu ernennet worden/** deme Sie auch alle zuvor gehabte Privilegien confirmirt. (Relation 1667 104,11)

そして四つ目が、「主文が分断された複合文」(gestrecktes Satzgefüge)である。この複合文では、「主文が副文によって少なくとも一度中断されている」(Demske-Neumann, 1996: 79) 構文のことを指す。Demske-Neumannによれば、以下のようなテキストがこの構文に該当する。

D) **Im Haag ist von Zeit der Staaten von Holland Abwesenheit/** so doch ehinst wieder erwartet werden/ **wenig vorgangen/** (Postzeitung 1667 28,27)

Demske-Neumann (1996) は、「1609年のRelationとAvisoから選出したコーパスに基づきながら量的な評価を行うと(36885語からなる総数で1445文)、複合文という複合構造に対しては、1609年のテキストにおいて数珠つなぎ構造タイプが目目を引くほど高い頻度で使用されていた(63.5%)」(Demske-Neumann 1996, 79)と主張している。このことからDemske-Neumannは、「この数珠つなぎ複合文の高い使用頻度は、17世紀の新聞における複合文の典型的な構造であるということ

7) 工藤・藤代は、「Frnhd.では、そもそも語源的に同じso, als, alsoがまだ厳密に区別されずに用いられている」(工藤・藤代 1992, 106)と述べている。よって、ここで使用されているalsは、副文に後続する主文の先頭に置かれたsoと考えられる。なお例文(C)も同様。

に帰することができる」(同上、同頁)と述べている。また芹澤(2013)では、17世紀の週間新聞において使用された数珠つなぎ複合文に関して「先頭の主文に出来事の現状を示し、後続する従属文によって出来事の原因や付帯状況を正確に伝えるという傾向が挙げられる」(芹澤 2013: 242)ことを指摘している。

このような先行研究をうけ、実際に17世紀初期の週刊新聞テキストの分析を行った。では実際に本論文の分析対象である17世紀初頭の週刊新聞から、数珠つなぎ複合文の例を挙げてみよう。

1) Es schreiben die von Ambsterdam/ **daß** die Kauffhandlung vnd Nahrung/ daselbst vnd ander orten [...] täglich abnemen/ vornemlich/ **weil** sich jetzt so viel Meerräuber auff dem Meer erzeigen/ **welche** immer die Kaufffahrende Schiff plundern/ (1609年6月18日 Cöln)

アムステルダムの人びとは以下のように書いている。すなわちアムステルダム及びその他の場所での商行為と食糧事情は、[...]日に日に低下しているということだ。それはとりわけ、現在なんとも多くの海賊たちが海に出現しているからである。その海賊たちは常に商船を襲い、略奪をしている。(太字は筆者による)

ここでは、主部のあとに、**daß**、**weil**、**welche**による副文がつながれている。本論文では、(1)のように複数の副文からなる構造を一個の数珠つなぎ複合文として数えることとする(つまり、(1)には1例の数珠つなぎ複合文があるのであって、3例あるのではない)。

既に示した表1及び表2において例示したテキストを例にしてみると、以下に示す表5のように、1609年1月8日の週刊新聞では10の副文が使用されているなかで、主文(Hauptsatz: HS)に対して2つの副文が連なる数珠つなぎ複合文が3例観察された。また、1786年1月2日の週刊新聞では7観察された副文のうち、2つの副文が連なる数珠つなぎ複合文が1例観察された。

表 5 : 17 世紀初期の週刊新聞と 18 世紀末の新聞における数珠つなぎ複合文

場所と日付	語数	副文
1609 年 1 月 8 日 Cöln	343	-weil... -HS-weil..., weil ... (2つの副文) (= 数珠つなぎ複合文) -HS-darbey..., -das ... (= 数珠つなぎ複合文) -daß ... -wo ... -welcher ... -HS-welche ... -vnd gleichwohl ... (= 数珠つなぎ複合文)
1785 年 11 月 24 日 Petersburg (1786 年 1 月 2 日)	233	-so ... -daher ... -wenn ... -HS-da ... -daß ... (= 数珠つなぎ複合文) -daß... -daß...

今回分析した 17 世紀初期の週刊新聞の総計 12 の記事においては、総単語数 3,517 語の内、数珠つなぎ複合文は 15 観察された。一方、18 世紀末の『パイロイト新聞』では総単語数 3,370 語の内、数珠つなぎ複合文は 7 観察された。総単語数はほぼ同数であるなかで、18 世紀末の新聞では、数珠つなぎ複合文の使用がほぼ半分となっている。

2.3. 動名詞を使用した名詞句

このように、数珠つなぎ複合文は確かに 17 世紀の週刊新聞の言語的特徴といえる。では、18 世紀末の新聞には、特有の言語的特徴がみられないのであろうか。そこでここからは副文という概念からは少しはなれ、句の構造に注目してみたいと思う。その際、とりわけ動作名詞⁸⁾が中核に置かれた名詞句に着目する。

今回の分析対象である 1786 年 1 月 2 日の『パイロイト新聞』では、次のよう

8) 本論文では、Bußmann (2002) が述べている Nomen Actionis のうち、接尾辞 -ung によって派生した名詞のこと動作名詞として把握する。

な名詞句が観察された。

2) Dieß Memoire enthält Vorstellungen und fordert einige Erläuterungen über die unter Vermittlung des Ruß. Hofes, zwischen St. Königl. Preuß. Majestät und dem Magistrat von Danzig geschlossene Convention. (『パイロイト新聞』1785年11月24日 Petersburg (1786年1月2日)からの報告)

この備忘録は苦情を含み、そしてロシア宮廷の調停のもとでプロイセン王室の陛下とダンツィヒの市参事会間で締結された協定に関するいくつかの解説を要求している。(下線は筆者による)

下線が引かれている箇所の中核には動作名詞が使用されており、一つの名詞句となっている。この動作名詞を中核に置いた名詞句では、どこで、誰がという内容が、描写されている。このような動作名詞を中核に置いた名詞句の使用は、17世紀初期の週刊新聞では、12記事(3,512語)の内2例しか観察されないが、18世紀末の『パイロイト新聞』では12記事(3,370語)の内、21例観察されている。したがって、17世紀初期に比べて18世紀末の新聞のほうが動作名詞を使用した名詞句の使用割合が高いといえることができる。

2.4. 構文と句の構造の変遷

これまでの分析結果を踏まえると、17世紀初期の新聞テキストと18世紀末の新聞テキストでは、副文の使用頻度においては違いがみられなかったものの、次のような変化が観察されたといえる。すなわち、18世紀末の新聞における数珠つなぎ複合文の使用頻度は、17世紀と比べると少ない。しかし、動作名詞を中核に置いた名詞句という観点から考察すると、17世紀初期に比べて18世紀末の方が使用頻度は高い。

Polenz (2013)によれば、「16世紀から18世紀においては、法律語、学問語、専門語において論証的行為を明確に表現するために、文レベル(接続詞、従属接続詞、代名詞的副詞)そして文成分レベルでの接続要素が増加した」(Polenz 2013: 299-300)という。本論文で扱った17世紀初期の週刊新聞テキストの場合も、「文レベルでの接続要素」、とりわけ従属接続詞を使用した接続要素が多く使用

されている。17世紀の週刊新聞では、副文を連ねていくことで、生じた出来事に関する付帯状況（原因、経緯等）を明確にそして正確に伝えたといえるだろう。しかしながら19世紀になると、「16世紀から18世紀の不明確で過剰な従属形式は大幅に避けられ、それゆえ複合文構造はわかりやすくなった」（Polenz 2013: 303）と指摘されている。このことはすなわち、従属接続詞の多用によって高い文語性を保持していた16世紀から18世紀のテキストが、19世紀になるとその文語性が緩和され、「わかりやすい」テキストになったという意味であると理解できる。本論文で分析した18世紀末の新聞テキストでは、副文使用の頻度は17世紀初期の週刊新聞と同じであったが、数珠つなぎ複合文の使用頻度は減少していたことがわかっている。つまり、18世紀末の『パイロイト新聞』は、複合文構造という観点において相対的に「わかりやすい」テキストになっていることになる。

しかしながら、ここで注意しなければならないのは、18世紀末の新聞テキストは数珠つなぎ複合文の使用が減少した一方で、動作名詞を使用した名詞句の使用が17世紀初期の新聞テキストと比較してより高い頻度で使用されているという点である。動作名詞を中核に置いた名詞句は、前置詞句をいくつも連ねることで、長く複雑な名詞句を構成している。このことはすなわち、時代の流れとともに、生じた出来事を伝える方法として、副文を連ねる構成から、句を連ねる構成へと変化したということである。しかしながら、数珠つなぎ複合文が果たしていた付帯状況等の表現内容が動作名詞を中核に置いた名詞句によって担われるようになり、複雑な句が形成された。複合文の使用が減少したからといって、テキストが「わかりやす」くなったという相関関係にあるとは単純にはいえないだろう。

3. 18世紀末の新聞テキストとモード雑誌の比較

3.1. 副文および句の比較

この章では、共時的な比較として、18世紀末の『パイロイト新聞』と同時代のモード雑誌テキストを分析して行く。まずは、18世紀のモード雑誌テキストも副文という観点から見ていくことにしよう。1786年から1789年までの女性の服装を扱った各記事において、どれほどの頻度で副文が使用されたのかを以下の表6にまとめた。

表 6 : 18 世紀末のモード雑誌における副文の出現割合

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	平均
3.5	4.6	2.2	2.3	3.4	2.9	2.7	5.1	0.4	3.5	3.1	0.9	1.9	2.8

今回分析した 13 の記事（全 4,721 語）の場合、100 語中、副文は 2.8 文あったという結果が得られた。この値を 18 世紀末の『パイロイト新聞』の、100 語中 3.3 文と比較し、対数尤度比の値を割り出すと 2.07 という値が得られる。この 2.07 という値は、0.5% 基準（100 回に 5 回錯誤することのある可能性）で 2 つの値に有意差があることを示す値である 3.84 よりも低い数値である。すなわち、今回得られた副文使用の割合である 18 世紀末のモード雑誌の値 2.8 と 18 世紀末の新聞の値 3.3 に有意差はないと言うことができる。

次に、18 世紀末の新聞テキストに特徴的であると確認できた動作名詞を中核に置いた名詞句の観点からモード雑誌テキストを分析してみると、動作名詞を中核に置いた名詞句は 13 記事（全 4,721 語）の中で 1 例しか観察されなかった。これは、同時代のテキストであっても、動作名詞を使用した名詞句の使用という点において新聞テキストとモード雑誌テキストには違いがあったということを示唆している。たしかに、モード雑誌テキストには動作名詞を使用した名詞句はほとんど使用されていなかった。しかし、注目すべきことに、同じ句であっても、動作名詞ではない名詞によって作られる前置詞句がモード雑誌にいくつも使用されているのである。例えば、次のようなテキストである。

- 3) Um den Kopf ein Rehgraues Band mit weißen Saume, das vorn auf der Stirn von einer goldnen Schnalle gefaßt, unter dem Federbusche in eine große Schleife gebunden wird und über die Krampe bis auf die Achsel herab hängt. (『豪奢とモードのジャーナル』 („Journal des Luxus und der Moden“) 1786 年 4 月号)

頭の周りには白い縁取りのあるノロジカ灰色のリボン。そのリボンは額正面で金の留め金によって留められ、羽の束の下で大きなりボン結びにむすばれ、そして帽子のつばを超えて肩まで垂れ下がっています。(下線は筆者による)

下線で示した前置詞句では品物が何で出来ているのか、品物がどこにあるのかと

いう情報を描写している。18世紀末の新聞テキストでは、動作名詞を使用した名詞句（前置詞句）によって、主語や述語、目的語などを表していたのに対し、モード雑誌での前置詞句は、事物の形状や位置を示す役割を担っている。

3.2. 「語り」テキストと「記述」テキスト

18世紀末の新聞テキストとモード雑誌テキストにおける、句による描写内容の違いに関して、Eroms (2008) の「テキスト化の戦略」を踏まえながら考察してみたい。Eroms (2008) は、Werlich (1975) によって知覚心理学的な観点で分けられた5つのテキストタイプ、すなわち「語り (Narration)」、「記述 (Deskription)」、「論証 (Argumentation)」、「説明 (Exposition)」、「指示 (Instruktion)」（Eroms 2008: 80、『ドイツ言語学辞典』1994: 1025）に基づき、4つの「テキスト化の戦略」の型を提唱した。それは、「語り (Erzählen)」、「記述 (Beschreiben)」、「論証 (Argumentieren)」そして「指示 (Anweisen)」である。この4つの型のうち、とりわけ「語り」と「記述」の型に注目したい。Eroms は「語りの型によって過去の事柄が伝達され、記述の型によって事物、人、実情などが無時間的に表現される」と述べている (Eroms 2008: 82)。さらに Eroms (2009) では、「語りのテキスト化の戦略が優勢であるテキスト種は口頭による出来事の報告や童話、新聞報道、小説」などであるという (Eroms 2009: 1598)。これらの点を踏まえると、18世紀末の新聞テキストは、Eroms によって分類された「語り」の型が優勢的に使用されていると考えられる。すなわち、18世紀末の新聞テキストは生じた出来事を伝えるテキストであり、時系列に沿って出来事の描写を行う。それはまるで、再現VTRのように、すなわち動画的に出来事を描写するという特徴を持っているとも言える。

では、同時代である18世紀末のモード雑誌テキストはどうだろうか。Eroms (2008) は「語りのテキストが時間軸に沿っているのに対し、記述のテキストは原則的に空間軸に沿っている」(Eroms 2008: 88)としている。そして、Eroms によって、記述テキストに典型とされる一つに、例えば事典のような情報を提供する実用テキストが挙げられている (Eroms 2008: 91 参照)。今回分析した18世紀末のモード雑誌テキストでは、前置詞を使用して、空間の中で事物の形状や素材、位置を示しており、Eroms の「記述」の型が優勢的に使用されていると考えられる。

当時のモード雑誌テキストには時間的に物事が変化するという経過が考慮されておらず、まるである瞬間を捕らえた静止画を描写しているかのようである。

「語り」の型が優勢的な18世紀末の新聞テキストと、「記述」の型が優勢的な18世紀末のモード雑誌テキストのどちらにも名詞句（前置詞句）が使用されているが、時間か空間かという点で大きく異なっていると言うことができる。

4. 結

17世紀初頭に初めて週刊新聞が登場したことで、各地で起きた出来事を定期的に入びとに伝えることが可能となった。時間軸に沿って出来事を語る動画的なテキストは、17世紀初頭の段階において、付帯状況を表す副文が合わさった複合文を多用することで描写されていた。複合文を多用した文語的なテキストはしかしながら、複雑な文構造のために読む際の困難さを高めたといえるだろう。だが時代の経過とともに、複合文の使用が徐々に緩和されていく。18世紀末の出来事を語る動画的なテキストとしての新聞では、複合文に取って代わって動作名詞を使用した名詞句を使用することで、時系列の描写を行ったのである。複合文の使用が減少したことから、一見すると相対的に理解しやすいテキストになったと考えられるが、今度は長く複雑な名詞句が多く使用されるようになったため、理解しやすいテキストであったと単純に推し量ることはできないだろう。

ところで、このような名詞が支配的なテキストをエガース（1975）は「凝縮度の高い情報への努力」（エガース 1975: 72）とし、現代のドイツ語文章語の特徴と指摘している。本論文で得られた結果の限りにおいてではあるが、現代の文章語の特徴とされる名詞を主体とする言語的特徴は、18世紀末の新聞テキストに既に現れていたということができよう。さらに言い換えるのであれば、18世紀末の新聞テキストは現代ドイツ語の文章語の先駆けとなっていたと言えよう。

一方、記述する静止画的なテキストの特徴を持つ18世紀末のモード雑誌テキストは、動作名詞ではない名詞を使用した前置詞句を使用しながら、空間という概念の中で事物の形状や位置を描写している。そのため時間軸に沿いながら過去の出来事を描写する18世紀末の新聞と、空間軸に沿って位置関係等を描写する同時代のモード雑誌とでは、その句の使われ方に質的な違いが見いだせるのである。

<参考文献>

原典資料

Schöne, Walter (Hg.) (1940): *Die Relation des Jahres 1609 in Faksimiledruck*. Leipzig.

Journal der Moden. (1786)

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jpjournal_00000358

(閲覧日：2016年6月19日)

Bayreuther Zeitung. (1786):

<http://bavarica.digitale-sammlungen.de/resolve/display/bsb10505361.html>

(閲覧日：2016年6月19日)

2次文献

Bußmann, Hadumod (Hg.) (2002): *Lexikon der Sprachwissenschaft*. Stuttgart.

Demske-Neumann, Ulrike (1996): Bestandsaufnahme zum Untersuchungsbereich Syntax.

In: Fritz, Gerd/Strassner, Erich (Hg.) (1996): *Die Sprache der ersten deutschen Wochenzeitungen im 17. Jahrhundert*. Tübingen, S. 70-125.

エガース, ハンス (1975) (岩崎英二郎訳) 『二十世紀のドイツ語』白水社.

Ebert, Robert Peter/Reichmann, Oskar/Solms, Hans-Joachim/Wegera, Klaus-Peter (1993):

Frühneuhochdeutsche Grammatik. Tübingen.

Eroms, Hans-Werner (2008): *Stil und Stilistik. Eine Einführung*. Berlin.

Eroms, Hans-Werner (2009): Stilistische Phänomene der Syntax. In: Fix, Ulla/Gardt,

Andreas/Knape, Joachim (Hg.) (2009): *Rhetorik und Stilistik. Ein internationales Handbuch historischer und systematischer Forschung*. 2. Halbband. Berlin. S. 1594-1609.

Kröll, Christina (1979): *Journal des Luxus und der Moden. Kolorierte Kupfer aus Deutschlands erster Modezeitschrift*. Dortmund.

工藤康弘・藤代幸一 (1992) 『初期新高ドイツ語』大学書林.

Kuhles, Doris (2000): Das „Journal des Luxus und der Moden“ (1786-1827). Zur

Entstehung seines inhaltlichen Profils und seiner journalistischen Struktur. In: Kaiser, Gerhard/Seifer, Siegfried (Hg.) (2000): *Friedrich Justin Bertuch (1747-1822). Vergleicher, Schriftsteller und Unternehmer im klassischen*. Weimar, S. 489-500.

Polenz, Peter von (2013): *Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart*. Band 2. 17. und 18. Jahrhundert. Berlin.

シュトラスナー・エーリヒ 大友展也訳 (2002) 『ドイツ新聞学事始-新聞ジャーナリズムの歴史と課題』 三元社.

芹澤円 (2014) 「ドイツ最古の週刊新聞の書きことば性をめぐって—出来事をどのように報道するか—」 [金水敏・高田博行・椎名美智 (編) 『歴史語用論の世界—文法化・待遇表現・発話行為—』 ひつじ書房 219-245 頁.].

鈴木将史 (2000) 「フォス新聞：ドイツ語圏最初の教養新聞 (その1)」 『人文研究』 (99) 61-83 頁. 小樽商科大学.

閲覧サイト

Log-likelihood and effect size calculator: <http://ucrel.lancs.ac.uk/llwizard.html>

(閲覧日 : 2016 年 9 月 17 日)

(せりざわ・まどか 学習院大学外国語教育研究センター非常勤講師)

Satzkonstruktionen von Texten in Zeitungen und einer Modezeitschrift der Frühen Neuzeit

—Erzähl- und Beschreibungstext

Madoka Serizawa

Auf die Geschichte der Druckschrift in Deutschland zurückschauend kann man sagen, dass in ihr Flugblätter im 16. Jahrhundert, die z. B. die Idee des Protestantismus verbreiteten und auch als „Neue Zeitung“ verwendet wurden, eine wichtige Rolle spielten. Danach traten Wochenzeitungen im 17. Jahrhundert auf, dann wurde sogar eine Modezeitschrift im 18. Jahrhundert gegründet. Daran ist zu erkennen, dass die Druckschrift im Laufe der Zeit ihre Funktion (was für Informationen sollen mitgeteilt werden) erheblich vergrößerte.

Ausgehend von dieser Grundlage werden im vorliegenden Aufsatz die folgenden zwei Fragestellungen geklärt: 1) Wie veränderten sich die Satzkonstruktionen im diachronischen Vergleich von Zeitungstexten am Anfang des 17. und am Ende des 18. Jahrhunderts? 2) Welche Unterschiede können im synchronischen Vergleich eines Zeitungstextes am Ende des 18. Jahrhunderts mit dem zeitgenössischen Text einer Modezeitschrift beobachtet werden?

Der Untersuchungsgegenstand besteht aus jeweils 12 Artikeln der Wochenzeitung „Relation“ aus dem Jahr 1609 und der „Bayreuther Zeitung“ von 1786 und 13 Artikeln der Modezeitschrift „Journal des Luxus und der Moden“ von 1786 bis 1789.

Meine erste Fragestellung betrifft zunächst die Häufigkeit der Verwendung des Nebensatzes. So sind z. B. in einem Artikel der „Relation“ vom 8. Januar 1609, der über ein Ereignis in Köln berichtet und insgesamt aus 343 Wörtern besteht, 10 Nebensätze zu finden, woraus sich ergibt, dass darin 2.9 Nebensätze pro 100 Wörter verwendet werden. Bei Berücksichtigung der Verwendungshäufigkeit des Nebensatzes in allen 12 Artikeln der „Relation“ berechnet sich durchschnittlich die Verwendung von 3.6 Nebensätzen pro 100 Wörtern. Gleichermäßen gerechnet sind im Durchschnitt 3.3 Nebensätze pro 100 Wörtern

in der „Bayreuther Zeitung“ zu finden. Um festzustellen, ob diese beiden berechneten Durchschnittswerte (nämlich 3.6 der „Relation“ und 3.3 der „Bayreuther Zeitung“) einen signifikanten Unterschied bilden, wird der Likelihood-Quotienten-Test als Methode angesetzt. Daraus gibt sich, dass die Differenz der zwei Werte als insignifikant anzusehen ist.

Ein abperlendes Satzgefüge, was heißt, dass nach einem Hauptsatz einige Nebensätze folgen, gilt, laut Demske-Neumann (1996), als ein spezifische Merkmal von Texten der Wochenzeitungen im 17. Jahrhundert. In Bezug auf den vorliegenden Untersuchungsgegenstand der von mir ausgewählten Zeitungstexte aus dem 17. Jahrhundert ergibt sich, dass diese aus 3,517 Wörtern, verteilt auf 12 Artikel, zusammengesetzt ist, und es berechnen sich so 15 abperlende Satzgefüge. Hingegen sind nur 7 abperlende Satzgefüge in der „Bayreuther Zeitung“ aus dem 18. Jahrhundert (mit 3,370 Wörtern, verteilt auf 12 Artikel) zu beobachten. Dies zeigt letztlich, dass sich die Verwendung des abperlenden Satzgefüges vom 17. Jahrhundert zum 18. Jahrhundert etwa auf die Hälfte reduziert hat. Das abperlende Satzgefüge kann durch diesen Vergleich als ein Merkmal des 17. Jahrhunderts angesehen werden.

Zum Vergleich zu diesem Ergebnis soll der Gebrauch der Nominalphrase mit Verbalsubstantiv, in der der Inhalt, z.B. wer, wo usw., angegeben ist, als ein Kennzeichen der Zeitungstexte am Ende des 18. Jahrhunderts benannt werden. Der Grund dafür ist, dass einerseits in Texten des 17. Jahrhunderts nur 2 Nominalphrasen mit Verbalsubstantiv vorkommen, andererseits ist 21 mal dieselbe Phrase in Texten des 18. Jahrhunderts zu finden. Dies führt zu dem Ergebnis, dass die Nominalphrase mit Verbalsubstantiv in Texten am Ende des 18. Jahrhunderts häufiger als im 17. Jahrhunderts verwendet wurde. Texte werden also in dieser Hinsicht relativ einfacher. Es werden jedoch stattdessen komplizierte Nominalphrasen verwendet, sodass man nicht so einfach schließen kann, dass die Texte tatsächlich auch einfacher zu verstehen sind.

Um meine zweiten Fragestellung zu klären, wird zunächst die Verwendungshäufigkeit ermittelt. Es zeigt sich, dass in der Modezeitschrift durchschnittlich 2.8 Nebensätze pro 100 Wörter zu finden sind. Werden die zwei Werte 2.8 und 3.3 (der Wert der Verwendungshäufigkeit in der „Bayreuther Zeitung“) dem Likelihood-Quotienten-Test

unterzogen, dann zeigt sich, dass der Unterschied dieser beiden Werte insignifikant ist. Man kann also sagen, dass die Menge der Verwendungshäufigkeit des Nebensatzes bei der Modezeitschrift und der „Bayreuther Zeitung“ etwa gleich ist. Außerdem wird auf die Verwendung der Nominalphrase mit Verbalsubstantiv Bezug genommen, und das Ergebnis ist, dass nur einmal diese Phrase in der Modezeitschrift zu finden ist.

Es sind jedoch viele Präpositionalphrasen in der Modezeitschrift zu beobachten, die z. B. darstellen, wo eine Sache hingestellt ist, woraus die Sache besteht usw. In Hinsicht auf die Phrase lassen sich zwei Untersuchungsgegenstände aufklären: In Zeitungstexten am Ende des 18. Jahrhunderts werden ein Substantiv, Prädikat usw. durch die Nominalphrase mit Verbalsubstantiv ausgedrückt, während die Form und Stellung einer Sache in der zeitgenössischen Modezeitschrift durch Präpositionalphrase gezeigt werden.

Aus noch einem anderen Grund werden die Phrasen der Zeitungstexte, gemäß der „Vertextungsstrategie“ bei Eroms (2008), dem „Erzählen“ zugeordnet, weil „Erzähltexte zeitlich strukturiert sind“, wohingegen der Text der Modezeitschrift dem „Beschreiben“ zuzuordnen ist, weil „Beschreibungstexte im Prinzip räumlich orientiert“ sind (Eroms 2008: 88). Die Zeitungstexte drücken mit Nominalphrasen zeitlich geschehene Ereignisse aus, und die Texte der Modezeitschrift beschreiben mit Präpositionalphrasen die Räumlichkeit von Sachen bzw. Dingen. In beiden Texttypen ist die Verwendung der Phrase zu finden, trotzdem sie in Hinsicht auf die Raum-Zeit-Welt-Einordnung unterschiedlich gebraucht wird.